

昭和十五年八月

秘

人口政策要綱

(第一次)

人口問題研究所

人口政策要綱（第一次）

凡ソ適正十全ナル人口政策ヲ確立シ以テ悠久ナル帝國發展ノ根基ニ培ハンガ爲ニハ廣範圍ニ互
ル精密ナル科學的調査研究ノ結果ニ立脚セザルベカラザルハ言ヲ俟タズト雖、我が國現下ノ情
勢ニ鑑ミレバ、人口増殖政策ノ樹立ハ須臾モ緩セニスベカラザル現下喫緊ノ國家的要務ニシ
テ、其ノ主要政策トシテ考慮スベキ事項概ネ以下ノ如シ

第一 出產獎勵政策

一 家族賃銀（俸給）制度ノ確立

- (1) 有配偶者ニ對シ其ノ最低生活ヲ保障スベキ賃銀及俸給額ヲ定メ、結婚シタル場合少ク
トモ此ノ定額迄ニ増額又ハ増俸スルコト（夫妻共ニ賃銀又ハ俸給ヲ受クル場合ニハ夫ニ
ノミ適用スルコト）
- (2) 子女數ニ應ジテ昇給率及昇給速度ヲ加減スルコト
- (3) 以上ノ制度ハ賃銀及俸給ノ統制ニ關スル法規ノ制定上考慮スルコト
- (4) 以上ノ制度ハ官廳及官營工場ニ於テ卒先之ヲ制定採用シ、民間ノ經營ニ對シ之ニ準ズ
ル制度ヲ採用スベキコトヲ勸奨スルコト

(5) 民間ノ經營ニ於テハ平準金庫制ヲ併セテ採用セシムルコト(註一)

二 結婚ニ關スル適正ナル機關ノ指導獎勵

(1) 民間企業及經營ニ於テ福利施設トシテ結婚斡旋機關ノ設置ヲ獎勵擴充シ、其ノ聯絡提携ヲ圖ルベキ適當ナル機關ヲ設クルト共ニ適正ナル指導監督ヲ行フコト

(2) 結婚相談所等公設ノ機關ヲ設置シ優生婚ノ指導獎勵ヲ圖リ、結婚ニ關スル設備ノ利用等ニ關スル便宜ヲ與ヘシムルコト

三 其ノ他ノ結婚獎勵政策

(1) 結婚ヲ延期阻害スル一切ノ雇傭條件ヲ排除スルト共ニ職業ノ爲女子ノ結婚ヲ延期阻害スルコトナキ様努メシムルコト

(2) 晩婚ヲ阻止シ適齡婚、就中女子ノ適齡婚(二十歳前後)ヲ獎勵スルコト(註二)

(3) 獨身税ヲ創設シ人口對策ニ要スル經費ノ財源ノ一トナスコト(註三)

(4) 結婚ニ伴フ費用ノ輕減ヲ圖ルコト

四 出産及育兒ノ保護

(1) 無料又ハ低廉ナル産院及乳兒院ヲ設置擴充スルコト

(2) 出産用衛生資材ノ配給ヲ確保スルコト

(3) 一定數以上ノ婦人勞働者ヲ使用スル工場鑛山ニ對シテハ授乳所、保育所、產院、乳兒院等ノ施設ヲ強制設置セシムルコト

五 多子家族ノ經濟的保護

(1) 家族賃銀（俸給）制度ノ樹立普及（上掲）

(2) 多子家族ノ子女ニ對スル學用品ノ官公費支給及教育機關ノ授業料免除又ハ減額

(3) 優良多子家族ノ優良ナル子女ニ對スル育兒獎勵金ノ交付

(4) 租稅政策

所得稅ノ扶養家族ノ控除ヲ更ニ多子累進タラシメ、多子家族ニ對スル相續稅ノ減免ヲ行ヒ特ニ地方稅ニ於テモ多子家族ノ租稅負擔輕減ヲ圖リ、無子稅ヲ創設シテ人口政策費ノ財源ノ一タラシム

六 出產減退防止政策

(1) 國民優生法第十五條及第十六條ノ趣旨ノ徹底ヲ圖ルコト

(2) 避妊用品ノ製造販賣ハ原則トシテ之ヲ禁止スルコト（花柳病豫防ノ器具及藥品ハ避妊ニ利用セラレザル様適當ナル措置ヲ講ズルコト）

(3) 花柳病豫防及治療施設ヲ擴充スルコト

七 優生政策

- (1) 優生思想ノ啓蒙普及ヲ圖ルコト
- (2) 結婚相談所ヲ通ジテ優生婚ノ指導獎勵ニ努ムルコト
- (3) 國民優生法ノ徹底ヲ期スルコト

第二 死亡率改善・體力向上政策

一 全國都鄙別ニ厚生組織網ヲ確立シ死亡率特ニ乳幼兒ノ死亡率低下及國民體位ノ向上ヲ圖ルコト

- (1) 都市及農村ニ於ケル保健所及保育所等社會保健施設ノ普及徹底ヲ圖リ、之ヲ中心トシテ保健婦制度（社會保健婦）ノ擴充徹底ヲ期スルコト

- (2) 國費及地方費ヲ以テ保健婦（社會保健婦）養成機關ヲ設置シ保健婦ノ大量養成ヲナシ、之ヲ市、町、村ニ配置スルコト（註四・五）

二 醫療機關ノ普及ヲ圖リ前項ノ厚生組織網ト協力シテ治療ノ外疾病豫防ニ努メシムルコト

三 工場鑛山保健施設ノ擴充ヲ圖ルト共ニ工場鑛山勞務者ノ過勞防止ニ努ムルコト特ニ少年勞働及婦人勞働ノ保護ヲ強化擴充スルコト

四 結核豫防及治療機關ノ擴充ヲ圖ルコト

五 環境衛生施設ノ改善、特ニ庶民住宅ノ供給改善ヲ圖ルコト

六 榮養改善施設ヲ勸奨助成スルコト特ニ小學校兒童ノ榮養食給與ヲ擴充スルコト

七 國民體育ノ獎勵及心身鍛鍊ニ努ムルコト

八 國民體力管理制度ノ擴充強化ヲ圖ルコト

九 國民健康保險ノ擴充ヲ圖ルコト

第三 人口再分布政策

一 大都市ノ膨脹ヲ阻止スルト共ニ大都市ニ綠地帶ヲ設置スル等大都市ノ弊害ヲ阻止スルコ

ト(註六)

二 極力工場學校等地方分散ニ努ムルコト

三 農村ニ於ケル租稅其ノ他一切ノ經濟的負擔ヲ極力輕減スルコト

第四 精神運動及教育政策

以上述べタル制度施設モ、國民ガ此ノ精神ヲ理解シ民族使命ノ重要性ヲ自覺シ熱意ヲ以テ國策ニ協力スルニ非ザレバ其ノ效果ヲ發揮スルコト難シ、是レ制度施設ト並行シテ精神運動ヲ起スノ必要アル所以ナリトス。精神運動ニ當リ特ニ必要トスルモノ左ノ如シ

一 啓蒙宣傳及組織

(1) 啓蒙宣傳ヲ組織的ニ行フコト

(2) 右ノ場合ニ於テハ特ニ左ノ點ニ留意スルコト

(イ) 東亞新秩序建設ノ重大ナル民族的使命達成ノ根本條件ハ良質ナル多數ノ人口ニ存スル所以ヲ明カニスルコト

(ロ) 人口増加ヲ阻止スル思想ノ芟除ニ努ムルコト

(ハ) 特ニ出產増加ニ重點ヲ置クコト

(ニ) 特ニ都市ニ於テ徹底ニ努ムルコト

(ホ) 特ニ知識階級ノ教化ニ努ムルコト

二 表彰

(1) 政府又ハ團體ニ於テ各種ノ適切ナル表彰ヲ行フコト

三 教育機關ノ改善及擴充

(1) 大和民族ガ民族接觸、民族鬭爭ノ經驗ノ乏シキニ鑑ミ、教育機關ノ徹底的改善及擴充ヲ圖リ、諸民族協力以テ興亞ノ大業ヲ實現スベキ根基ヲ啓培スルコト

(2) 民族博物館ノ新設及擴充ヲ圖ルコト

(3) 外國及外地ニ於テ活動シ又ハ活動スベキ中堅大和民族ノ養成機關ノ新設及擴充ヲ圖ル

コト

(4) 高等女學校以上ノ女子教育機關ニ特ニ保健科ヲ設置シ保育保健ニ關スル知識及若干ノ技術ヲ授ケ併セテ婦人ノ國家的使命ヲ認識セシメ、卒業後ハ厚生組織網ニ編入シテ保健婦ノ補助機關トシテ郷土ニ於テ社會的活動ヲナサシムルコト

(註一)

家族賃銀(又ハ俸給)トハ現時經濟上ノ原則トシテ賃銀又ハ俸給ハ専ラ勤勞者本人ノ業績ニ依リ、本人ノ家族的負擔ノ如キハ之ヲ省ミザルニ反シ、賃銀俸給ハ家族扶養ノ責任ニ應ジテ差別ヲ設ケントスルモノナリ(此ノ實施ノ方法トシテハ基本賃銀ノ外ニ家族ニ對スル手當ヲ加給スルヲ通稱トス)。本制度ハ其ノ設定ノ動機ヨリスレバ

一 單ナル福利施設タルモノ(歐洲戰前及現時ノ任意施設ハ概ネ之ニ屬ス)

二 物價騰貴時代ニ家族多キモノニノミ手當ヲ給シテ全般的ノ賃銀引上ヲ防止セントスルモノ(歐洲戰時中獨逸其ノ他各國ニ行ハレタルモノ)

三 最低賃銀ノ決定ニ當リ、勞働者本人ノ賃銀ト家族手當トヲ分チ、以テ賃銀支拂ヲ合理化セントスルモノ(濠洲及ニユーヂーランド)

等アルモ、現時ニ於テハ概ネ

四 人口ノ維持増加ヲ目的トスルモノトス(獨逸、伊太利、ハンガリー、スペイン、ベルギー、佛蘭西皆然リトス)

本制度ノ(1)形體ハ戰時勞働不足ノ時代(2)單ナル福利施設程度ノモノ(3)官公事業(4)鐵道ノ如キ獨占業等ニ於テハ雇主ノ單獨負擔トスルコトヲ得ルモ、廣ク一般私營事業ニ行ハントスルトキハ平準金庫制ニ依ルニ非レバ家族持勞働者ハ却ツテ排斥セラル、逆效果ヲ現ハス。之何レノ國ニ於テモ一般私營事業ニ家族手當ヲ強制スルトキハ平準金庫制ニ依ル所以ナリトス、平準金庫ノ組織(佛國 *caisse de compensation* ト稱ス)ハ國ニ依リ區々ナリ。佛蘭西、ベルギーニ於テハ雇主ノ業務別又ハ地方別組合廣ク行ハル、モ、伊太利ニ於テハ國家、雇主及勞働者三者ガ分擔スルコト恰モ社會保險ト同様ノ制度ニ依ル。被傭者以外ニモ家族手當制度ヲ普及スルノ傾向ト共ニ漸次コノ社會保險類似ノ方法ガ普及スベシト思考セ

ラル。獨逸ハ一九三五年公資金ニ依リ一定收入以下ノ者ニ對シ家族手當ヲ給シタリシガ後失業金庫ノ資金ヲ其ノ財源トシタリ。近ク合理的ナル家族手當金庫ヲ設置スル豫定ナリ。家族賃銀ノ範圍程度ハ區々ナルモ官吏ヲ除キテハ何レノ國ニ於テモ有配偶ノ故ヲ以テ特別手當ヲ支給スルモノナク、手當ヲ支給スルハ其ノ子女ニ限ラレ、更ニ第二子（佛蘭西）又ハ第三子（獨逸）以降ニ限ルモノモアリ。

（參照 經濟學論集第十卷第二號北岡論文、家族手當制度論）

（註 二）

（イ）昭和十二年ノ有配偶女子ノ年齢別特殊出生率ヲミルニ二一・五歳ニ於テ最モ高ク（〇・三三四三）、從ツテ出産増加ノ見地ヨリスル統計上ノ結婚適齡ハ之ヨリ一歳ヲ差引タル二〇・五歳トナル又

（ロ）日本人女子ノ平均初潮年齢ハ一四・五歳ニシテ之ニ生理的成熟期間四年ヲ加フルトキハ出産増加ノ見地ヨリスル生理學的結婚適齡トシテ一八・五歳ヲ得。

依ツテ右二値ノ平均値タル一九・五歳ヲ以テ出産増加ノ見地ヨリミタル一般的結婚適齡ト爲スコトヲ得ベシ。

（註 三）

獨身稅トシテハ伊太利ノ制度最モ有名ナリ、同國ニ於テハ一九二六年獨身稅ノ名ノ下ニ二十五歳乃至六十五歳ノ獨身男子ニ對シテ獨身稅ヲ課スト共ニ獨身男子ノ所得稅ニ二五%ノ増徴ヲ行ヘリ。獨身稅ノ率ハ年齢ニヨリ異リ、當初ハ二十五歳乃至三十五歳迄年三十五リラ、三十五歳乃至五十歳年五十リラ、六十歳以上年二十五リラナリシガ一九二八年之ヲ倍額ニ増加シタリ。

佛蘭西ニ於テハ三十歳以上ノ獨身者及子ナキモノニ所得稅ヲ増徴シタリシガ、一九三九年ノ家族法典ニ依リ之ニ代ルニ家

族賠償税 (taxe de compensation familiale) ヲ課ス。其ノ納税義務者ハ綜合所得税納付義務アル獨身者、離婚者及鰥夫ニシテ子ナキモノトシ、税率ハ綜合所得税ヲ基準トシテ左表ニ依ル。

尙結婚後二年ニシテ子ナキモノハ綜合所得ヲ基準トシテ左表ノ通り無子税ヲ課徴セラル。

綜 合 所 得	獨 身 税	無 子 税	綜 合 所 得	獨 身 税	無 子 税
五 萬 法 以 下	三 %	二 %	五 萬 — 十 萬	六 %	四 %
十 萬 — 二十 萬	九 %	六 %	二十 萬 — 三十 萬	一 二 %	八 %
三十 萬 — 五十 萬	一 五 %	一 〇 %	五十 萬 — 八十 萬	一 八 %	一 二 %
八十 萬 ヲ 超 ユル 部分	二 〇 %	一 四 %			

左ノ者ハ除外ス

- (1) 子アリテ十六歳ニ達シテ死亡シタルモノ
- (2) 四〇%以上ノ廢疾者
- (3) 養子ヲスルモノ

(註 四)

乳幼兒ノ死亡率ヲ低下セシメントスル運動中最モ規模ノ大ナルモノハ、**ナチス**獨逸ノ國民福利團 (N.S.V.) ノ事業ナルベシ。同團ハ乳兒死亡率ヲ百分ノ四迄低下セシメントヲ目標トシ相談所、巡回指導、産院、母子保養所、榮養配給等凡ユル事業ヲ行ヒ協力者約五十萬、其ノ中九十八%ハ無給ノ有志者ニシテ四十戸ニ付一人ノ部落管理者 (Block Walter) ヲ置

キ凡テノ妊娠及出産ニツキ訪問婦ヲ派シテ指導ト必要ナル保護ヲ與フ。一九三七年ニ於ケル其ノ主タル活動狀態ヲ示セバ左ノ如シ

○協力者

總數（一九三七年末）

四四二、一三五_人

内専門家

國民監護者（男女）

三、五二九

幼稚園及託兒所婦

四、五七七

青年指導者（男女）

三七五

家庭指導者（男女）

二〇五

家庭世話人（男女）

一八六

看護婦

三、三五八

乳兒監護婦

四八〇

病人監護者（男女）

二七三

○母子扶助

世話妊婦數

二三九、一八七

世話未妊婦數

二一、七〇一

世話乳兒數

一三二、〇三八

○母ノ保養

一九三七年中保養所ニ送リタル母ノ數
右ト共ニ送リタル乳兒ノ數

七七、一六九
六、〇三八

○乳幼兒保護

託兒所、幼稚園預リ所（一九三七年末）

三、四六一

同上保護兒童數

一五五、三九四

收獲時託兒所、收獲時幼稚園（一九三七年末）

四、一一一

同上保護兒童數

一一五、三〇七

○家庭扶助

相談總件數 月平均

九七一、七八二

内獨身者

一四、八二一

無子ノ夫婦

一五、九三四

子一人ノ家庭

四五、三一三

子二人ノ家庭

四九、五〇六

子三人ノ家庭

四三、七九二

子四人以上ノ家庭

五九、九〇三

扶助申込

三、五〇五、二六〇

○救助及相談

救助所

二二、九六九_人

同上訪問者

三、二七四、〇四九

相談所

一、五〇九

同上訪問者

二九九、四三七

○食事給與

食事給與兒童數

毎月平均

一〇三、六五五

○少年保護

少年保養所ニ送リタル數

六三二、一五五

次ニ經費ニ依リテ其ノ活動ヲ見ルニ左ノ如シ

一、救助及相談所

五一四、七五九_{マルク}

二、託兒所、幼稚園

一〇、四〇五、九五九

三、兒童給食

七七九、四九一

四、妊産婦保護

二、二〇四、八三五

五、家計及職業扶助

八八六、一四一

六、母ノ保養

一一、八七七、二五〇

七、兒童保養

四二、〇二六、八五八

八、同上キャンペ	一、九一六、五八九
九、住宅扶助	一、五八五、七八三
一〇、各種經濟的給助	一九、八六〇、三〇七
二、團體補助、職員養成其ノ他諸費	五、八七七、二七二
三、少年給與	一、三六三、二〇八
合計	九九、二九八、四五七

尙我國ニ於テ乳幼兒保護施設ニヨル乳兒死亡率低下ノ實例ヲ見ルニ左ノ如シ

一 財團法人大阪乳兒保護協會

本協會ハ昭和二年七月創立セラレソノ事業トシテ小兒保健所ノ設置並ニ普及、保護醫、保護婦ノ養成等ヲ行ヒツ、アリ。昭和十三年末ニ於ケル小兒保健所數ハ大阪市二八、堺市二、合計三〇ナリ。

大阪府及大阪市ノ累年乳兒死亡率（出生百ニ對スル）ヲ見ルニ次ノ如ク漸次低下ノ

傾向ヲ辿リツ、アリ

	昭和六年	同七年	同八年	同九年	同一〇年	同一一年	同一二年	同一三年
大阪府	一四・九	一一・八	一三・三	一二・八	一二・二	一一・四	一〇・六	一〇・七
大阪市	一五・〇	一一・九	一三・四	一三・一	一一・八		一一・〇・三	一〇・二

二 財團法人東北更新會——乳幼兒妊產婦保護施設

東北更新會ハ昭和十年五月設立セラレ、東北六縣ニ於テ種々ノ社會施設ヲ爲シツ、アルガ就中之等各縣ニ於テ數村ヲ指定シ分會ヲ設置シ、乳幼兒妊産婦保護施設トシテ保健婦ヲ置キ村民ノ保健指導ヲナサシメ、更ニ一部ノ分會ニ於テハ囑託醫ヲ置キ乳幼兒妊産婦ノ健康指導ニ當ラシメツ、アリ。

昭和十一年ヨリ引續キ施設セル分會ヲ有スル村ニ就テ最近數年間ノ乳兒死亡率ヲ見ルニ宮城、岩手、山形、秋田ノ分會ハ施設前ニ比シ相當改善セラレタルヲ見ル。

		昭和八年	同 九年	同 一〇年	以上三ヶ 年平均	同 一一年	同 一二年	同 一三年	以上三ヶ 年平均
宮城縣	吉田村、八谷村、大鷹澤村、宮乃村 合計	七・九九	一〇・二六	六・五三	八・二三	六・六五	七・〇五	三・八三	五・八八
福島縣	五十澤村、御木澤村、大森村 合計	八・三九	一〇・八六	九・五四	九・四五	七・八八	九・三七	九・二五	八・九一
岩手縣	門馬村、内川目村 合計	一一・一八	一四・三七	一三・三三	一三・二〇	一一・四九	七・八三	一〇・四六	九・九五
青森縣	脇野村、船澤村、荒川村 合計	一一・六七	一三・四九	一二・九三	一二・六八	一三・六九	一二・八四	一〇・〇八	一二・九七
山形縣	湯田川村、豐田村、醍醐村 合計	一八・七一	一六・一七	一三・八七	一六・二一	一五・六五	一一・〇二	一三・三一	一三・二一
秋田縣	矢島村、南内越村、眞中村、川西村 合計	一三・六〇	一四・七四	一一・〇九	一三・二〇	一〇・〇〇	九・四三	一〇・八六	一〇・〇二

(註 五)

目下島根縣ニ於テ計畫中ノ(一)社會保健婦養成所設置、(二)高等女學校ニ於ケル保健科ノ設置及(三)縣下厚生機構ノ確立

ハ死亡率、就中乳幼兒死亡率低下策トシテ、人口政策上概ネ適切ナリト認メラル、ヲ以テ一事例トシテ其ノ概要ヲ掲グル
以下ノ如シ

一 島根縣社會保健婦養成所ノ設置

島根縣社會事業協會、恩賜財團軍人援護會島根縣支部及愛國婦人會島根縣支部ヲ以テ經營主體トシ、縣下高等女學校ニ島根縣社會保健婦養成所ヲ附設シ、本科及速成科ノ二部ニ分チ、前者ニ於テハ女子中等學校卒業者ヲ一箇年養成シ將來產婆及看護婦ノ免狀ヲ獲得シ、且社會保健婦ノ資格ヲ與ヘ島根縣ニ於テ保健狀態ノ改善ニ當ラシメ、後者ニ於テハ高等小學校卒業以上ノ學力ヲ有スルモノヲ收容シ、農閑期ニ於テ二週間宛年三回之ヲ開設シ、之ニ社會保健婦並ニ保育所保姆ノ業務ノ概念ヲ與ヘ、社會保健婦ノ補助者又ハ季節保育所ノ主任保姆タラシメントス。本科修了者ニハ社會保健婦ノ資格ヲ與ヘ縣内ノ愛育村、衛生指定村、國民健康保險組合、診療所、隣保館及學校、市町村等ニ有給配置ス。第一期養成定員本科六十名、一養成所當二十名、速成科百八十名、一養成所當一回二十名ノ見込。尙養成所ニハ母子寮及常設保育所ヲ附設スル見込。

二 高等女學校ニ於ケル保健科ノ設置

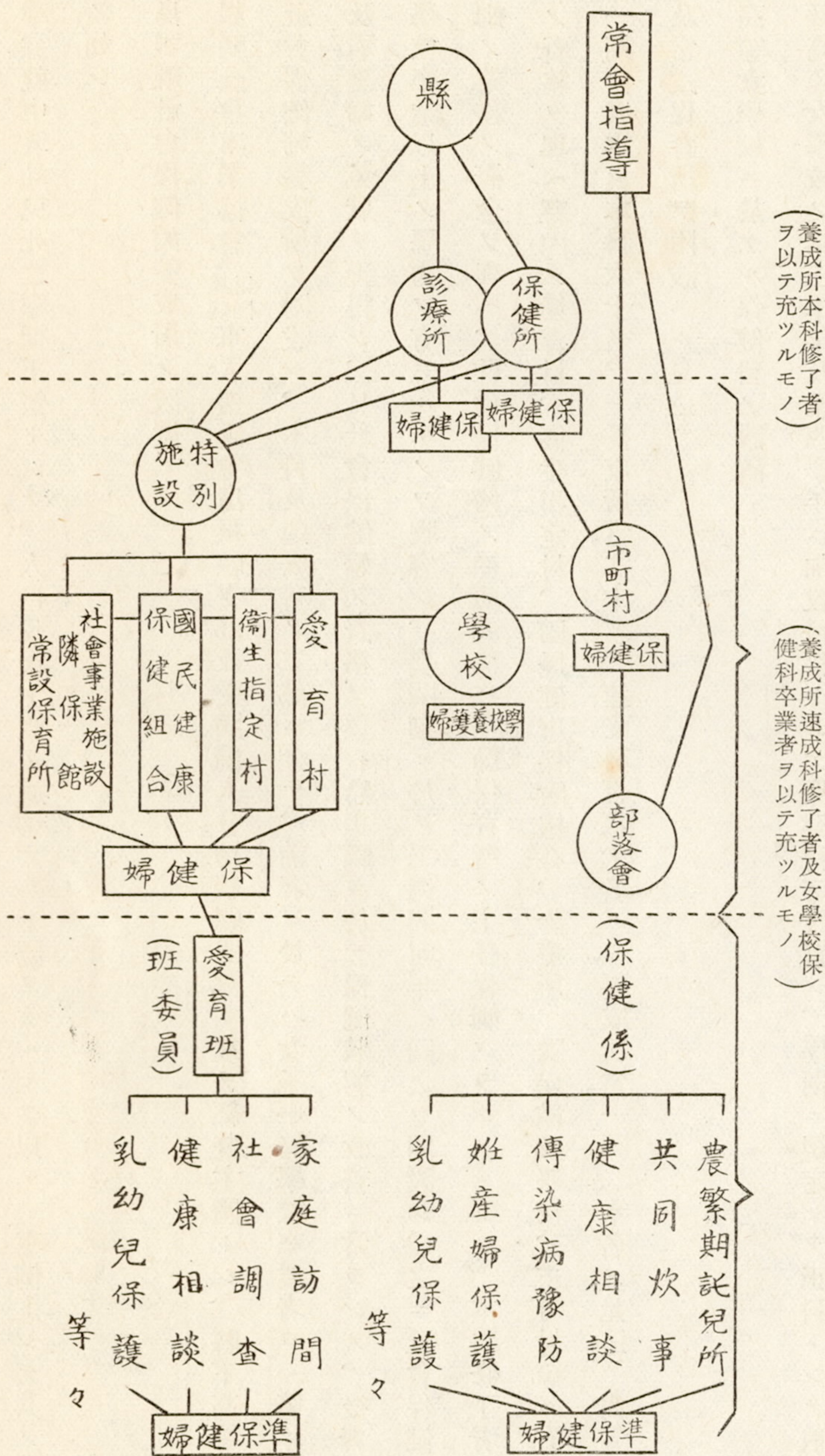
當縣高等女學校ノ第三學年及第四學年ニ加設科目トシテ保健科ヲ設置シ、學則ニ規定シテ正科トシテ取扱フ。生徒ヲシテ卒業後ハ社會保健婦ノ補助又ハ社會保健婦ニ準ズル者季節託兒所ノ主任保姆トシテ活動スルニ十分ナル實力ヲ附與シ以テ其ノ需要ニ應ゼントス。

三 島根縣厚生機構ノ確立

縣民ノ保健衛生狀態ノ革新ヲ期センニハ醫療機關其ノ他保健衛生施設ノ擴充ヲ圖ルヲ以テ足レリトセズ、縣民自體ノ

自覺ヲ促シ隣保相助ノ精神ヲ涵養シテ生活的協同ノ實ヲ舉グルヲ最モ緊要トスルコトニ鑑ミ、常會制度ヲ基礎トシテ厚生機構ヲ確立シ(一)及(二)項ニヨル社會保健婦及之ニ準ズルモノヲ以テ活動ノ中心トナサントス。其ノ機構ノ大要ヲ圖示スレバ左ノ如シ

府 町 村 厚 生 機 構



(註六)

一般ニ都市ハ農村ニ比シテ出産力著シク低ク之ニ反シテ死力高く、從ツテ人口増殖力著シク微弱ナルヲ特色トス。此ノ傾向ハ都市ノ規模大ナルモノ程著シキヲ以テ通例トス。而シテ都市ノ人口構成ヲ見ルニ農村ヨリ受容シタル一五歳乃至三五歳ノ青壯年人口ノ割合多ク老幼年人口ノ割合少キヲ以テ普通出生率ハ其ノ眞ノ出産力ニ比シテ過大ニ表現セラレ、死亡率ハ其ノ眞ノ死力ニ對シ過少ニ表現セララル、ヲ常トス。反之老幼年人口ノ割合多キ農村ニ於テハ出生率ハ過少ニ死亡率ハ過大ニ表現セララル、傾向アリ。從ツテ都鄙ノ普通出生率死亡率ヲ以テソノ各々ノ人口増殖力ヲ測定スルハ困難ニシテ特殊ノ方法ヲ用ヒテ此ノ都鄙年齡構成ノ差異ヲ除去セザルベカラズ。

今、京城大學醫學部教授水島治夫博士ノ調査ニカ、ル此ノ種計算ノ結果ノ一例ヲ示セバ左表ノ如ク、六大都市ノ増殖力即チ眞ノ人口自然増加率ハ全國ニ比シテ著シク低ク、中ニハ大阪市、神戸市等ノ如キ増殖力ヲ全ク喪失シ外部ヨリノ人口ノ補給ニヨリテ存續シ擴充シツ、アルノ状態ヲ示セルモノアリ。

内地六大都市ノ人口動態(昭和五年)

水島治夫博士算定

(人口一、〇〇〇ニ付)

	東京	大阪	京都	名古屋	横濱	神戸	全國
粗出生率	二三・三九	二四・八九	二四・五一	三一・一五	二八・四八	二五・〇四	三二・三五
眞出生率	二二・一九	二一・七二	二三・五四	二九・五七	二六・九六	二一・二五	三四・〇九
粗死亡率	一三・〇一	一五・三八	一六・一八	一六・六九	一五・六三	一六・七二	一八・一七
眞死亡率	二〇・一七	二三・五九	二二・二五	二二・〇九	二〇・七〇	二三・九二	一八・六九
粗自然増加率	一〇・三八	九・五一	八・三三	一四・四六	一二・八五	八・三二	一四・一八

眞ノ自然増加率
一人ノ女(配偶ノ有無ヲ問
ハズ)ガ生涯ニ生ム娘ノ數
同上子ノ數(男十女)

二・〇二	(-)一・八七	〇・二九	八・四八	六・二六	(-)二・六七	一五・四〇
一・〇六	〇・九五	一・〇一	一・二八	一・二一	〇・九三	一・五八
二・二〇	一・九六	二・〇八	二・六四	二・四八	一・八九	三・二四

(眞ノ動態率ハ安定人口法ニ依ル)

